

# 令和七年度 文学部 日本・中国文化学科 学校推薦型選抜 小論文②

## 〔注意〕

- 1 机上に受験票を提示しておること。
- 2 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- 3 解答は必ず別紙の解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。
- 4 解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入すること。受験番号・氏名が記載されていない答案は無効となる場合がある。
- 5 この冊子は、問題用紙（三頁）および解答用紙（二枚）からなっている。
- 6 この冊子のうち、落丁・乱丁、印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて申し出ること。
- 7 句読点やカッコ、数字はそれぞれ一字として数える。
- 8 満点は二〇〇点である。ただし、一二五〇点に換算する。
- 9 試験時間中の退室は認めない。
- 10 問題と下書き用紙は、持ち帰ること。

次の文章をよく読んで大意を記し、筆者が考える親孝行のあるべき姿を明らかにした上で、それに対する自分の意見を記せ。解答用紙の範囲（七〇〇字）内に記すこと。（100点）

人の世にあるや、大かた才能の誉れの、名を求めて知らるると、求めずして聞ゆるの賢さかし愚かのけぢめはあれど、此の二一つは俱にいたづら事なりける。子の親に仕ふること、このいやしき名を思ふにはあらで、親のたまへる生みの真心をしも損はず、学びて行ふと、庭の教へを頭かぶにしてつとむるあり。又学ばず受けず、ただ露ばかりも違はじとする人の尊さよ。近き世に見聞くは、いと貧しき人の子の、まだあげ卷めざしなるほどより、誰が教へを見聞くにもあらず、いと有難き志もて仕ふるは、生みの宝の子とこそ思ひしに、やうやうおよすけゆくままで、そこに在るとだに聞えぬは、いかに成り立ちけん、いといぶかしうもこそあれ。つかさ位高き公達は、御親兄の前に冠を正し、かたちつくろひ、ゆめ違はじとかしこみ給へば、御心の怠りはいかなりとも聞え流れずおはせりき。富人の子も是にならひて、善し悪しの名は世に聞えぬにや。

今世がたりに人の聞えし。都六条わたりに、馬場の何某なにがしと云ふ人、兄の病して、はかなかりしことににつきて、仕ふる君の御いとまたまはり、母一人、兄の子の幼きを連れて、市に隠れたりしに、親をかしづき、みなし子をいとほしむまめ心を、あたりの人の見聞きて、公おほやけのみことのままに、訴へ出でん事を告げ知らせしに、「あなかなし、子の親に仕ふるを誉れとせんこと、いとも恥あること也。我はあからさまにこそ物すれ。召されて物問はせ給はんに、何とかはこたへ奉るべき。訴へ出でられぬさきに」とて、母を負ひ、幼なきが手を引きて、夜に隠れ、いづちへも逃れ去らんとす。家主隣の人々あわてまどひ、かく尊き志をうばふべからずとて、訴への事止とどまりぬ。今は昔の御宮づかへに召しかへされ、家をおこし給へりとや。

(上田秋成「旌孝記」による)

(注)

○才能……学問や文事の才。 ○このいやしき名……虚名。 ○学びて行ふ……聖人の教えを実行する。 ○庭の教へを頭にして……親の教えを念頭に置いて。 ○あげ巻めざし……童子の髪型。 ○およすけゆく……成長する。 ○いといぶかしうもこそあれ……たいそう不審なことである。 ○御心の怠り……不孝。 ○富人……富貴な階層の人。 ○市に隠れ市井に身を隠し。 ○まめ心……真心。 ○公のみこと……孝行を奨励する布告。 当時、孝行者を顕彰する制度があった。 ○訴へ出でん事……孝行者がいると報告すること。 ○昔の御官づかへ……以前に仕えていたところ。

## 二

次の文章をよく読んだ上で、本文の内容を要約し、この一文に託して筆者が主張したかったことを述べ、それに対する自分の意見を記せ。解答は解答用紙の範囲(七〇〇字)内に記すこと。(100点)

昔有リ一国、國中一水、号曰狂泉ト。國人飲此水、無シ不狂ハ。唯國君穿井而汲ミ、獨得無恙。國人既並狂ヒ、反謂國主之不狂為狂ヘルト、於是聚謀、共執國主、療其狂疾、火艾針藥、莫不畢具。國主不任其苦ニ、於是到泉所、酌レ水飲ム。飲畢便狂ヒ、君臣大小、其狂若一ナルガ。衆乃歎然。我既不狂ハ、難シ以テ。

(袁粲「狂泉記」)

— 3 —

(注) ○並みんな。  
○火艾お灸。  
○我この文の筆者袁粲。

令和七年度 文学部 日本・中国文化学科

学校推薦型選抜

小論文② 正誤表

問題  
二 3 ページ

問題文 1 行目

誤 無シレ不ルハレ狂  
正 無シレ不ルハレ狂